

資料 上田万年演説「日本語学の本源」(一八九五年六月一五日)

安田敏朗

1 はじめに

知人の言語学者・長田俊樹さんからの問い合わせメールがそもそものはじまりであった。国立国会図書館のデジタルコレクションで公開されている上田万年「日本語学の本源」は著作リスト(「上田万年先生著述目録」「国語と国文学」一五卷一〇号、一九三八年一〇月)にも入っていないようだが、知っているところをおしえてほしい、というものであった。現在長田さんは上田万年の講義ノートなどの子細な分析をつうじて、上田がヨーロッパの言語学をどの程度咀嚼していたのか否か、ひいては日本の言語学受容のあり方について研究をすすめており、お役にたてればと思ったものの、はずかしながら知るところは何もなかった。

上田万年(一八六七―一九三七)について、辞書的な説明をしておく。言語学者。江戸名古屋藩下屋敷に生まれる。一八八八年帝国大学和文学科卒。近世文学研究を志すが、招聘講師のB・H・チェンバレン(注8参照)の教えを受ける。ドイツ・

フランス留学（一八九〇〜九四）後、帝国大学教授（一九二七）。その間、文部省専門学務局長、国語調査委員会主事、東京帝国大学文科大学学長（現在でいえば文学部長）、神宮皇学館長、臨時国語調査会会長などを兼任。国学院大学学長（一九二七〜二九）。近代国語学の基礎をつくった。『国語のため』（一八九五年）『国語のため 第二』（一九〇三年、ともに富山房）が代表作。作家田地文子（一九〇五〜一九八六）の父。

右の両著をあわせて『国語のため』として二〇一一年に平凡社東洋文庫から校注・解説をだした身としては、インターネット公開されている資料にきづかなかったのは痛恨の極みだったが、「日本語学の本源」は、どうやらほとんど言及されていない資料のようである（そうでなければ、これもまた大恥である）。この演説（今日的感觉では「講演」だが原文にしたがう。以下同）がなされたのは、一八九五年六月一日のことであり、ちょうど『国語のため』初版が刊行される月でもあるのだが、上田の教えをうけた新村出（一八七六〜一九六七）が作成した「上田万年先生年譜」（新村出筆録・古田東朔校訂『上田万年国語学史』教育出版、一九八四年）をみても、この演説の記載はない。のちにふれるが、この資料は演説のやや不完全な筆録で、完成稿にはいたらず、活字化されなかったために著作目録からも漏れてしまったと考えられる。

インターネット公開資料なので環境があればだれでも閲覧できるが、手書き資料でありそのまま読み進めるのは時間がかかるため、翻字をおこない、適宜注をつけて提供することにした。不明の箇所もおおいが、注でふれるようにのちの上田の講義で示される事例が一部あるなど、資料的な価値はあるだろう。ご指正いただければさいわいである。

国立国会図書館のホームページによれば、著作権保護期間がきた公開資料については、翻字などに際しての許可は不要とされている。ここに、上田万年演説「日本語学の本源」が国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧できることを再度記し、あわせて長田俊樹さんに謝意を表したい。

2 「日本語学の本源」の経緯

上田が演説にいたる経緯であるが、資料冒頭に「田口君の御親類なる上田ピン君小生の宅を訪はれ田口君より此會へ出て何

か一席述べよとの旨を傳へらる」とある。上田は前年六月に留学からもどり、「本郷西片町10にノ32」（正確には、本郷区駒込西片町）に居を定めていた（新村出前掲「上田万年先生年譜」、二五三頁。ちなみに一八九六年に「本郷向岡弥生町」に転居する（二五四頁））。駒込西片町は上田の勤務先の（東京）帝国大学のすぐそばであり、自由主義経済思想家で歴史家・政治家などとして多彩な活動を展開した田口卯吉（一八五五〜一九〇五）の住まいも駒込西片町十番地にあった（一八八五年から没するまで居住。建物は現存している）。ご近所だったことになる。「上田ピン君」が当時田口卯吉の家に寄宿していた上田敏（一八七四〜一九一六）だとすれば、田口からの依頼を伝える役割を担っていてもおかしくない（なお、田口のかつての隣人で明治初期に沼津では寄寓して英語を教わるなどおおきな影響をうけた洋学者・乙骨太郎乙（一八四二〜一九二二）の甥が上田敏であった——田口親『田口卯吉』（吉川弘文館、二〇〇〇年）参照）。上田敏は当時帝国大学文科英吉利文学科の学生で講師ラフカディオ・ハーン（のち小泉八雲、一八五〇〜一九〇四）などのもつて学んでおり、文科大学教授であった上田万年への使者として適任といえる。上田敏は、帝国大学の教員・学生・卒業生で構成された帝国文学会が一八九五年一月から刊行をはじめた『帝国文学』の学生発起人のひとりでもあり、たびたび寄稿することになる上田万年と面識がなくなかったとも考えられる。また、田口と上田万年はご近所同士ですでに接点があったと考えてもよいが、駒込西片町は文化人が多数住んでいたところであり、前年九月に衆議院議員に当選していた田口は、気鋭の帝大教授として活躍をはじめていた上田万年に上田敏を通じて接触をもととしたのかもしれない。ともあれ、上田敏は「田口君の御親類」というわけではない。

「此會」とあるのは、経済学協会のことである（注2参照）。注でふれるがこれは田口卯吉が一八七九年から発行していた『東京経済雑誌』と関連があり、この時期、年に七、八回第三土曜日にひらかれていた演説会の筆記録を、たびたび「経済学協会演説」として掲載していた。上田万年が演説した回の直後に刊行された、第七七九号（一八九五年六月二二日）の「経済学協会六月例会」の記事にはこうある（八六二頁）。

経済学協会にては去十五日（第三土曜日）午後五時半より富士見軒に於て例会を開けり。出席員は（……）等の諸氏にして、文科大学教授上田万年先生来賓として臨席せられたり。晚餐後、日本国語の起源に就て学問上最も有益なる同先生の演説あり

り、尋で尾崎（三良）氏は今後の財政策に就て目下の問題たる償金使用法を演説せられたるが、之れに就ては渡邊（洪基）、曾我（祐準）、植村（俊平）氏等も各々熱心に其意見を述べられ、頗る激論ありて、時の遷るを覚えず、漸やく十二時頃に散会せり、右演説筆記は追て本誌に掲載すべし、

（一）内は引用者補

出席者には田口卯吉もいる。ここから六月一日に上田が演説（ここでは「日本語の起源」だが）をしたことが確認される。富士見軒は、麴町区富士見町にあった洋食店。洋食をとってから演説、議論というのはなにやらハイカラでもあるし、アルコールは入ったのだろうか、などと余計な推測もしたくなる。一八九五年六月といえば、ときあたかも三月の下関講和会議をへて四月に日清講和条約が調印されるも即座にドイツ、ロシア、フランスによる三国干渉がおこなわれてまもない時期である。この回到尾崎三良（一八四二〜一九一八、官僚をへて当時は貴族院議員）がおこなった「今後の財政策」は、清国からの賠償金二億テールの使い道についての演説であり、議論がもりあがったようである。となれば、内容的にも上田の演説はやや浮いてしまっていたようにも思われる。

つぎに、『東京経済雑誌』第七八一号（一八八五年七月六日）の「経済学協会演説」に以下のような記述があらわれる（八頁）。

本篇は去六月十五日経済学協会に於いて尾崎三良君の演説せられたるものにして、此前に上田万年君の演説ありたれども、編纂の都合に依り今ま茲に之を掲載し、次回に上田君の演説を掲載すべし、

尾崎三良は、前年三月に田口らと帝国財政革新会を結成、政府の財政政策に意見するなどの活動をともししていた。内容がタイムリーだったこともあるのだろうが、「今後の財政策」の筆記録は二号にわたって掲載された（次号には渡邊洪基の質疑も掲載）。尾崎の日記にはこうある。

六月十五日 土 雨

六時富士見軒ニ至ル。経済会例会ナリ。予ハ戦後ノ財政策ト云題ニテ凡ソ一時間余ノ演舌ヲ為ス。速記者アリ、之ヲ速記ス。後五ニ議論アリ。夜十一時三十分散会。(伊藤隆・尾崎春盛編『尾崎三良日記 下巻』中央公論社、一九九二年、七一頁)

この日の日記はこれがすべてであり、上田の演説についての感想はない。前掲資料では開会は五時半となっているので、尾崎が若干遅刻したことがわかるのだが、最初に食事をとるののでたいした影響はないだろう。ここでもおおいに議論がもりあがったことがうかがえる。

尾崎の日記からは速記者がいたことがわかる。速記者とはいうものの、速記術を習得した速記者というよりも、筆記者という程度ではないかと思われる。ともあれ、上田の演説は毛色の異なるものでもあり、資料中に固有名、専門用語の書きもらしが散見されるのは普段とは分野のへだたった内容であったことも関係があるのかもしれない。

ただ、上田の演説は「次回」以降をいくらさがしても『東京経済雑誌』に登場しない。

なお、この六月一五日、田口卯吉は多忙であった。三国干渉に屈した政府の責任を明確にする、軍備拡張を求める、などの決議をおこなうため、帝国財政革新会などが芝区愛宕山の頂上にあつた愛宕館(一八八九年開業)に午後一時にあつまり、政友有志会を結成、決議を発表している。田口は決議実行のための実行委員となつた(『政友有志会の決議』『東京経済雑誌』七九号、一八九五年六月二二日、八五七―八五八頁。ちなみに尾崎三良の名前はない)。その後、五時半からの経済学協会定例会にかけつけたことになる。政府は六月一九日に集会及結社法により政友有志会の解散を命じ(『政友有志会の結社禁止』同前、八五八頁)、六月二六日に田口ら六名は起訴された。田口は罰金刑をうけるも控訴、無罪をかちとっている(田口親『田口卯吉』吉川弘文館、二〇〇〇年、二一六頁)。こうした、日清戦争後のやや世情不安のなかで上田万年の演説がおこなわれたことになる。田口は政治的に多忙であったことは確実で、唐突で急な上田への演説依頼にはこうした背景があつたのかもしれない。

ともあれ、「編纂の都合」が具体的にどのようなものであつたか不明だが、上田が多忙で十分な確認ができなかつたため

あろうか、不完全な筆記録のみが残された。本資料をよくみると、終盤近くには筆者とはおそらく別の手による書きこみ（漢字カタカナ）が端の方に細くなされ、そしてそれが消されていることがわかる。本文への書きこみもあるので、上田自身の手によるものか不明だが、すくなくとも二度加筆修正されたものが和綴にされたものと思われる。

本資料には国立国会図書館の前身にあたる帝国図書館の所蔵印と、「昭和一八・七・一八購入」の印がおされている。

3 「日本語学の本源」の内容

この演説は、言語学の手法にもとづいた「日本語学」のあり方を述べ、それに依拠して「日本語」の起源（「本源」）をめぐる議論に対する上田の立場を表明したものである。

一九世紀末は、日本人の起源論がもりあがるなかで日本語の起源にも注目があつまようになっていた。国語学者・大野晋（一九一九～二〇〇八）が指摘するように、

日清戦争に勝つて資本主義国家の仲間に入りかけた日本は、民族精神を強く振起し、国家主義の体制を整へつつあった。そこで、日本人の起源、系統の問題が史学者、知識人の間に強く意識されるに至り、言語学専門家以外の人々から日本語の系統に関する論議が提出され始めた。（大野晋「日本語の系統論はどのやうに進められて来たか」『国語学』一〇輯、一九五二年九月、六一頁）

といった時代背景があった。大野は「言語学専門家以外」の例として、本資料でも登場する井上哲次郎や田口卯吉などの所説を紹介していくのだが、井上はともかく、田口が日本語の起源について論じるようになるのは、一九〇〇年前後のことになる（『国語上より観察したる人種の初代』『史学雑誌』一二篇六号、一九〇一年六月、「人種の初代の根拠地を決するは国語に如くなし」『史学雑誌』一二篇一〇号、一九〇一年一〇月など）。こうした議論は思いつきの域をでないものであり、学問的に十分

実証的なものは少なかった。とくに日本語とインド・ヨーロッパ諸語とをむすびつけようとする田口の説に対しては新村出が反論をおこなっている（田口博士の言語に関する所論を読む『言語学雑誌』二巻四号、一九〇一年七月）。大野は新村の反論を紹介したあと、「言語学専門家が慎重に構へて容易に系統を断じないに對して、言語学専門家以外の人々が勇敢に論断して世人の興味をわき立たせるといふ傾向は、この後にも幾度か繰返されて行く」（大野晋前掲論文、六三頁）と指摘している。詳細は割愛するが、たしかにこの構図はくりかえされる。

一八九五年時点で、「言語学専門家」からの反論は十分にはなされていなかったと考えてよいのだが、上田の演説の核心もこうしたところに向かつていくことになる。

上田は「言語学」はことばの規則をあきらかにする学問であると同時に、古代の人びとの生活をあきらかにするためにも応用されるべきものとする。これは日本で文献学と訳された Philologie の思想である。さらに、未来のことばのための学問でもあるべきだとする。

上田は日本語の起源についての説をいくつか紹介している。神授説、中国語説、ウラル・アルタイ語説、朝鮮語説、マレー語説、メキシコ説、ビルマ語説、混淆説。

とくにどれに軍配をあげるでもなく、議論の前提の妥当性を問うていく。つまり、比較対象とすべき語が科学的にたたく構築されたものかどうか、ということである。これは比較言語学の大前提といえるのだが、「若し本源を論ぜんとするには我々は精確なる土臺、動かざる土臺を以て新たに仕事を始めざれば立派なる判断は出来能はざるべしと考ふるなり」と立場を明確にしめしている。

そのためにも日本語の歴史をあきらかにすることの必要性を指摘する。そして人類学などの学問の援用についてもふれるが、ある民族のはなすことばがおおきく変化することはままたることなので、民族的同一と言語的同一とを同列に論じることの危険性をのべ、宗教的、文化的な影響や、たんなる類似をみきわめていくことの重要性を指摘している。

結論としては、「今少し深く研究を尽さざる以上は我々の言語はウラル、アルタイに属するとか、或は印度、亜弗利加に属するとか云ふ如きことは容易に言ひ得ず、否單に事実の上より二三似寄りの点を取り来りて是れが似寄れり彼が似寄れりと云

ふが如きことは学問上取る能はざるなり」というもので、「今日世人が為し居る如き調べ方にては到底精確なる結果は得られざるべしと言ふに在り」と、きわめてまっとうである。このことは強調してよいだろう。田口卯吉がどのような顔をしてきいていたのか、みてみたいものではある。

なお、上田が一八九五年五月に脱稿し、翌年三月の『国学院雑誌』（二巻三号）に掲載された「今後の国語学」（のちに、『国語のため』訂正再版、富山房、一八九七年におさめる）には以下のような言及がある。「日本語学の本源」とほぼ同時期に書かれたものである。

日本語の起原なども目下研究すべき屈竟の問題なり。我が国の諸先哲は、此の問題につきて攻究せるもの少なく、又、ありても人類学的の観察には乏しくして、多くはたゞ自然に此の土に発生したる、所謂神生のものなりとするに過ぎず。されど、輓近泰西諸学者の研究によりて、種々の説行はるゝを見る。即ち、或は東北の方、アイノ人種、西北の方、西比利亞朝鮮より、或は南の方馬來半島より来れりといふものあり、又、西の方支那より渡れりと考ふるもの無きにあらず。而して、此等は皆人類学を基礎として立たる説なれども、右の諸説の中、いづれ尤も正しきか、又これらの諸説に反して、我が古来の説の如く、全く神生のものなるか、是れ、実に今日の国語学者が研究すべき大問題なり。（上田万年（安田敏朗校注）『国語のため』平凡社東洋文庫、二〇一一年、一四九頁）

日本語の起原については「国語学者が研究すべき大問題」というとらえ方をするものの、「日本語学の本源」でしめした、こうした諸説が手法としてまちがっている、という見解までのはべていない。

その意味では、こうした手法をとる以上「慰み仕事」にすぎなくなる覚悟をもて、と断言している「日本語学の本源」の方が上田の本音にちかい見解をかたっているといえるのかもしれない。

しかし上田自身、具体的に学問的反論を展開したわけではない。藤岡勝二（一八七二～一九三五）が論文「日本語の位地」のなかで「ウラルアルタイの言語」の一二の条件をかかげて、これと日本語の同質性、親近性を論じて、明治期の系統論のひ

とつのに到達点を示したのは一九〇七年のことであり、『国学院雑誌』一四卷八、一〇、一一号、一九〇七年八月、一〇月、一月)、金沢庄三郎(一八七二〜一九六七)が博士論文を『日韓両国語同系論』として三省堂から出版したのは一九一〇年のことであった。比較言語学的手法による研究の登場には、いましばらくの時間が必要であったということである。

4 「日本語学の本源」の本文

〈翻字にあたって〉

■和装本なので、一丁表、三丁裏などと表示すべきであるが、デジタル資料であることをかんがみ、参照の便宜のため画面表示のコマ数、さらに右左を、各丁の最初の文字の脇に示した。たとえば4右とあれば、4コマ目の右半分の第一文字目であることを意味する。

■原文にほとんど改行はないが、L字記号は改行指示であると判断し、改行した。

■外国人の人名、外国語の単語など、筆記者がききとれなかったであろうところには、冒頭の一字と〇〇字アキなどの書きこみがされているので(〇〇字アキ)などと示した。冒頭の一字もふくめ必ずしも正解ではない。編集上の〇〇字アキという指示にはしたがった。

■読みやすさのためのルビは()で記した。それ以外のルビは原文のとおり(ママは除く)。

■漢字字体はできるだけ原文に忠実に翻字した。したがって、「會」と「会」、「國」と「国」などの統一はしていない。

■濁音表記について、たとえば助詞「が」が「か」と表記されていてもそのままとした。

³_左
二十字()

日本語学の本源

明治二十八年六月十五日

去る月曜日か火曜日のことなりき 田口君の御親類なる上田ビン^③君小生の宅を訪はれ田口君より此會へ出て何か一席述べよとの旨を傳へらる^④、然るに此會は經濟會ゆゑ余の専門とする所と關係することなしと云ふも不可なきか故に一應御断り申したり、然るに何にても宜しきゆゑ一席述べらる^⑤の違ての御言葉に付き、未熟をも顧みず出席して日本語学の本源と云ふことに付て少しく陳述することとなりたり、

本會は多く実業上經濟上に従事せらるゝ方々の会合なれば一方の側より見れば餘興ともなり、又一方より見れば田口君の如きは日本語学に付き又日本人種に付ての御研究もあるやに承れば多少其間に關係を附け得べしと信ず、

近頃に至り日本語のことに付きて議論を立つることも大に為し易くなりたる様あり、現に田口君は日本人種論を經濟雜誌^⑥に掲載せられ又高橋五郎君^⑦は日本語と蒙古語及びマレー語との關係を八紘と云へる雜誌^⑧に續々掲載せらるゝを見受れたり、されば此場合に於て日本語の本源に付きて余の平素考ふる所を述べらるゝも無理ならざるべし、

本論に入るに先だち少しく申置きたきことは言語学と云ふことなり、是れは極めて近頃日本に入來たる學問にて明治十九年にチャンバレーン^⑨か大学に於て日本語の講義を為せし時より表面上日本語の研究が初まりたりと云ふも不可なかるべし、偕言語の研究とは抑々如何なることを為すものなりやと云ふに世界の言語を一纏めとし、其言語の上にある現象を取調べて區別を為し其上にて規則を発見するを第一の目的と為す、而して論する所は言語上の法律規則を定むるを目的とすれども其二つを應用する方法あることを知らざるべからず、第一は古代の開化即ち言語を話し居る人に付きて其人が今日の如く歴史的の時代にあらざる即ち歴史なき時分には如何なる生活を為したりやと云ふことの研究に大なる光輝を與へ又一方には日本語なり支那語なり總て言語と云ふものは如何なる方針に進むかに向つて充分の忠告を為す學問にてあるなり、假に日本語の場合を以て述べれば今日の日本語と云へるものは如何なるものなるか、和學者の言ひつゝある如く中古の日本語を以て我々は甘ずべきか、或は現今の日本語を今少し變じて世界へ打て出る時の日本語は如何にすべきかを判断し、又東洋の商業上に付きて英語を以て通

用する言語と為すの可否又日本語はそれだけ力を保つことを得るや否や事はれまで言語学上養成し来りたる所の考案に付て今日我々他のサイエンスを利用したらんには大に判断力なるもの助けを為すに足らんと信ず、現に西伯利亚^(シベリア)、支那、朝鮮、或はアイヌ語は如何なる働を為すかを知るは大に此学問の力に依て順席を立つるを得べしと信ず、殊に諸君か従事せらるゝ実業教育上日本語は果して従來の儘にて可なりや否やと云ふことも是れ亦此学問の光にて五年乃至十年間に究めざるべからざる問題なるべしと思はる、要するに言語学は極めて新学問なれども右の如き方針にて進むべきものなり、而して此学問の入り来りし結果として日本語の研究も今日までの見方と異なり古代のことを論ずるにも又將來の日本語の発達を論ずるにも大に其方針ヲ異にするに至らむことは御互に覚悟して可なりと思ふ、故に今日に於て日本語学は其方針を以て進み行くものなりと云ふことを茲に述べ置くなり、されば余は今日其方針を以て日本語の本源^{7.左}を論ずる考なり、

日本語の本源と云ふことに付きての従來の説は余の記憶する所に依れば非常に多くして其数概ね七八種もあらんかと思はる、一々詳述することは出来ざるにより概略を述べむ

第一説 神か人を作りたるものにして人を作ると同時に人に話を為す力を與へたりと云ふ説と、之に伴ふて人は自ら生れたるものなり、自ら生れたるが故に又自ら話す力を有するものなりと云ふ説あり、其見方は神が作りたるものなりと云ふ説と人の作りたるものなりと云ふ説とは大なる相違あれども此二説ハ先づ一纏めとして可ならむ、斯は和学者の謂ふ所の言語説にして、西洋にもゴツドか興へたりとか、或は人間が作り出したものとか云ふ説あれども是れとは餘程相違あり、

第二説 支那人種が日本に來り作りたるものなり、故に支那人種の言語即ち日本人種の言語なりと人種の点より論ずる者あり、此点に付きては日本にても古き人は多少其考を有する者あり、英吉利にてもホ^ホ(三字アキ)と云ふ人は日本語は支那語なりとの説をなせり⁹。

第三説 日本人はウラル山アルタイ山地方即ち北西伯利亚地方の人種に属す、故に日本人の言語は其人種の言語に相違なしと、此ことは最も古き考にしてウインナの大学に居りたるポルランドと云ふ人の考証なり¹⁰、高橋五郎君の書かれたる論說中にもポーランドゲーボルと云ふ匈牙利の学者¹¹の説に匈牙利語、メジヤル語¹²と日本語と似寄り居るとの説あり、メジヤルは矢張ウラル、アルタイに属する言語なり、田口君の言はるゝ如く若し日本人種が蒙古人種にてありとせば、日本の言語は蒙古人種

の言語と異ならずと云ふにはあらざるかと思はる、

ウラル、アルタイのことに付きて少し述べたきことは抑、バビロニアを作りしはアカデヤ¹³人種なり、此アカデヤ人種の言語と日本語とハ似寄れり、さればウラル、アルタイの人種は或はアカデヤの人種が四方へ移轉せしにはならずやと云ふ説¹⁴もありと思ふ、此ことは何人が述べたるかと云ふことは忘れられども何れ調べたる上御話すべし

第四説 朝鮮語と日本語との関係なり、是れは前に英吉利公使館に居りたるイストン¹⁵の考案なり、此考案は従来日本語の本源に付きて出でたる論文中に於て能く適し居る側なり、如何となれば発音の側文法の側より云ふも日本語と朝鮮語と能く似寄り居ることとなり、

第五説 マレー語に属すると云ふ説なり、是れは井上哲次郎君¹⁶等の唱道する所にして日本人種はウラル山、満州等を経てマレーより来れるものなりと云ふにあり、此他歐羅巴人中にも此説を為すものありしやと思はるれども今判然記憶せず

第六説 此説は日本語が其處より来りたりと云ふにはならずも墨西哥のト¹⁷（二字アキ）と云ふ人種と日本人と関係ありと云ふことなり、余は其原文を見たることはなきもフ（二字アキ）の書きたる書の中に参考として載せあるが故に斯の如き説のあることを認め置くも不可なかるべし

第七説 緬甸語と日本語との関係を説きたるものなり、併し此説は考証の付き居るにあらざして言語の組立方を論じたる説の様¹⁸に思はる

第八説 人種混同の説なり、日本人種は種々なる人種が集合したるものなるが故に従て日本語の中には種々なる部類の言語が混同して進歩したるものなりと云ふ説なり、此説は能く記憶せざれども左程古き説にあらず、エ（二字アキ）ポット、及び彼の師なるカ（二字アキ）¹⁸の説などは矢張此説の中に属す、此の混同説は即ちマレー語支那語朝鮮語等種々なる説を取り最も善きところを混合したるものなれば最も平易にして最も都合宜しけれどもレ（二字アキ）の説よりは細かならずと言ふことを得べし、

尚一言すべきハ物集高見¹⁹先生の意見なり、先生の意見ハ日本人種は天孫の降臨したるものにして其前に、日本には種々の人種居り天孫御降臨なさるゝまでは一種特別なる言語ありたれども人と御交際になり即ち人民を清めたまひしと共に其以前に使

用せし言語を忘れて土蕃の言語を採用せられたるものなりと云ふにあり

本源説ハ先づチョツと述ぶるも斯の如く七八種あり、故に諸種の書物を取調べたらんには尚ほ多くの箇条を立て、御話しすることを得べし、

されど余の眼より見るときは斯る日本語の本源説ハ何の理窟あるかを疑ふなり、凡そ議論を為すには先づ其議論を為す土臺たるべきものなからざるべからず、然るに是等の論者の調べ居る眼目に著目するときは一点の疑を生ぜざるを得ず、而して西洋人中日本語の起源に付て説論したるものを見るに歐羅巴に於て研究したる人の中にはホ「二字」^②が最も良き見識¹²を有するものの如し、然れども徳川時代又ハ足利時代の日本語を以て西伯利亜地方の言語と比較し居るが如きことありては如何に良き判断なりとも之を良判断と云ふ能はず、又日本人の調べたる所にも今日まで徳川時代の言語は如何、足利時代は如何、或は王朝の言語は如何、古事記日本紀は耶蘇紀元後七百十二年頃に作られたるものなるがそれより以前の言語は如何、即ち文字となりて我々の手に入るまでの言語は歴史に依るも能く分らず、それより神武天皇の紀元までは如何と云ふに我々の言語にてありながら之を考へ出すこと能はず、又西洋人の比較する所は日本語の歴史に付て調べたる考案にあらざりて藻塩草¹³或は徳川時代の小説を以て日本語の比較を為し居るが故に遺憾なることの多き言を俟たず、假に日本語はそれにて可なりとするも其比較する所のマレー語或は蒙古語と云へるものは果して日本語と比較し得べき時代の言語なりしかと云ふことも是れ亦我々は疑はざるを得ざるなり、而して日本語を取るに耶蘇紀元八世紀頃の言語を取り蒙古語或は満州語も亦同じく八世紀九世紀頃の言語を取りてインダクチーブ^②に論じ而して是れが比較を為したる人は是れまであらざるなり、殊に蒙古語或はハ「二字アキ」の言語はアリヤン人が大に輕蔑し居たるなり、然るに其データとするハ「二字アキ」の考証の如きは概ね宣教師の書きたるものにして其宣教師は何程の学力を有するかと云ふに極めて古き学派に属し発音法或は言語に適ふたる心理学的の研究と云ふ如きことは頭腦中毫も之なきなり、斯る不完全なる人の調べたるものを以て日本語を比較して論ずる側より觀察するも我々の採て以て証拠となすべき確然たるものの出づべしとは思はれざるなり、先づ今述べたる如き側にて著述したるものは従来往々之れあれども余は斯るものに拠ることを好まざるなり、若し本源を論ぜんとするには我々は精確なる土臺、動かすべからざる土臺を以て新たに仕事を始めざれば立派なる判断は出来能はざるべしと考ふるなり、

〈別行〉

諸言語を下するには精確なる土臺に依るべしと云ふことは次に起る所の問題となるなり、其は即ち人類学、生理人類学的に或人間の鼻は白しとか、白くなくしか、歯は如何とか云ふが如く人種の異同を以て調査するか如き是れ亦一の方法なれども是等のことは寧ろ第二の問題にして、先づ第一に言語上の比較標準を取らざるべからずと云ふことは動かすべからざる道理なり、然らば言語の上に如何なる標準を取るかと云ふに第一に我々の注意せざるべからざる点は音韻の仕組にあり、例へば日本語は古くより清音のみにてバビブベボ或はダヂヅド或はガギグゲゴと云ふか如き濁音は後世に至りて出来たるものなり、又ラリレロの音の変化する前にハ前に母韻あれども²³他の国には之なし、斯の如き発音上の組織が他の国のと似寄り居るや否やと云ふことは我々か第一に注意すべきことにして、此ことに付て論ずるときは蒙古語に属するか、満州語に属するかを知り得べし、

併し尚ほ茲に一の注意せざるべからざることは日本語は五十音と云へるものが大に勢力を得、假名を以て總ての発音を書くこととなりしより以来古く発音したるものも皆此假名の勢力の爲めに壓せられたることを忘るべからず、例へばインキならばインキと云ふことをインクと云ふこととし、若しこれにて不都合あらばケ^ッを取てインと云ふことと為すか如き発音上のキヤ〈二字アキ〉とし又スタ〈二字アキ〉ならばスタ〈二字アキ〉と云ふことか普通朝鮮語或は南洋の言語にありや否やと云ふことに著目せざるべからず、此側に於ては未だ我々の学問は極めて幼稚にして殊に假名を貴ぶか故に殆ど比較する土臺を有せずと云ふも不可なき憐れなる有様に居るなり、

次に注意せざるべからざるは言語の構造の似寄りと云ふこととなり、例へば形容詞が名詞の前に出るとか、副詞が動詞の前に出るとか言語のセンテンスは各國異同あるものなり、それ等のことが果して似寄り居るや否や、印度欧羅巴語と日本語とは大に相違あるなり、此言語の構造と云ふことを論ずる側よりすれば日本語と蒙古語とは全く一致するもの如し、即ち満州のバ〈二字アキ〉を翻譯したる一書あれども我々が今其一書を見る時は徹頭徹尾満州語と日本語とはシン〈二字アキ〉あるなり²⁴、然るときは日本語は正しく蒙古語に属すると云ふこと得るも、言語を比較するにシン〈二字アキ〉のみを以て決して此言語が同一なりとは言ひ得ざるなり、又前のホル〈二字アキ〉の発音上の異同を見るに二つの必要なる箇條あり、日本にて月と云ふ

ことを滿滿州^{マンモウ}にてツキと云ふや否や、又日本人は古への北蒙古人種が変化したるものなりとせば其言語は一々似寄り居るや否やを研究するを第一とす、例へば我々が一、二、三、四と云ふことをヒイ、フウ、ミイ、ヨウ^{ヨウ}と云へども蒙古アルタイ等の地方に於て果してヒイ、フウ、ミイ、ヨウと云ふ発音ありや否や、又名詞、代名詞と云ふか如きものにして蒙古地方の言語と同様なるものありや否や、其他日本にては行くと云ふことへ「ル」を付して行かる、或は行かるゝとか云へり、是等のことが蒙古、滿州等にありや否や、故に單にシン^{シン}（二字アキ）のみを以て日本の言語と同一なりとは言ふべからず、或は人種と人種の交際ありとすれば同一なることもあらん、然れども判然此言語は此言語と関係し居るとは言へず

次に今一つの要件は言語の上には必ずア^ア（二字アキ）¹⁸あるなり、日本にて月と云ふことを希臘にてはヤ^ヤ（二字アキ）と云ひ、メヂヤ^{メヂヤ}にてはア^ア（二字アキ）と云ひ、マ^マ（二字アキ）にてはヒカルと云ひ、或は羅甸にてはロ^ロ（二字アキ）と云ふか如く一の名詞には必ず理窟あるなり、其理窟が似寄り居るや否や、日本にてカミと云ふことあれども此神と云ふことは上にある上と同じ音なり、斯の如く上と云ふカミと神と云ふカミとの相違あり、即ち心理的事物を観察して此カミと云ふ言語の似寄りありや否やと云ふことは著目せざるべからざるとなり、其名の附け方をへ^へ（二字アキ）と云ひ又独逸語にてコ^コ（二字アキ）と云ふ其は物を見て其物の或特点を取て名を附するものなり、其名の附け方は種々の人種に依て相違あるものなり、或は談話の上¹⁸に於てもフ^フ（二字アキ）、セ^セ（二字アキ）の二種ありと思ふ、お前とかアナタとか或は他の言葉を以て云ふときハ三人固めて言ふが如きホームあるなり、斯く考へて似寄りありや否や能く其異同を知らざるべからず、

次ハ注意として言ふべきこととなり、例へば日本語ならば日本語は如何なる履歴を有するやと云ふことを知らざるべからず、御五日本人は大和言葉なり、併ながら日本人種中にも大和に居り日向に居り或は出雲に居りしが如きことは暫く措いて、大和は一の都なれば大和にて発達したる日本民族なり、さりながらそれより京都に往きて暫く王朝にて主権を執らせられしが其後関東に移りては名古屋其他に種々影響ありしならんも、何れにせよ大和言葉は大和京都の間に居りし人民の言語なりと云ふを得べし、然らば大和京都の言葉は恰も今日東京にて用ふる言葉が発達したる如く、而して此東京の言葉が是れより以後日本の言語なるやも知れず之と同じく我々は今日大和言葉がホーム上の言葉なりと云ふも可ならん、さりながら其他の部分即ち奥羽地方、九州地方或は山陽地方にては如何なる言語を以て話せしか、されば当時主権者の言葉が文学となりて後世に伝はり、主

権者の居りし所を除いて他の部分は如何になり居りしかと云ふことは忘るべからざるなり、即ち其側に付て我々が今日より勉むべきは方言の研究なり、此方言の上には文書上見ること能はざる種々なる言語あるなり、其側の研究成りて而して他国の言語を調べざれば單一に此の語と彼の語と比較して直に言語が似寄り居るとは言ひ得ざるなり

次に出るは人種の体格の似寄り即ち顔色の似寄り、風俗の似寄りと云ふことなれども行相学²⁰或は人類学も研究上大なる助けとならずとは言はざれども人種のことを論ずるは第一の希望たる言語を調ぶる所の望みか充分立ちたる後に人種の方に論究すること言語学者の希望なり

茲に御参考までに申上げたきことあり、日本の風俗の中に人の死するときハ北枕にする風俗あり是れ印度にある風俗なり、何故に北枕とすることか印度に始まりしかと云ふに印度の北に於てインタル河²⁰云ふ河あり即ちヒマラヤ山に沿ふたる所にして其ヒマラヤ山の下に嶋あり、而して印度の人死亡すれば祖先の居りたる方へ帰るものなりと云ふて北枕に為すとのことなり、其風俗か即ち佛教に伴ふて日本へ来りたるなり、或は古事記を見るに「三字アキ」神²⁰か御降誕ありて其母が死去せられたりと云ふことあり、或は印度の古典に火を製して其火を以て人家を焼失せしと云ふか如きことあれども是等は一のミソロジーなり、斯の如く信仰の上或は風俗のことは諸所に旅するものなり、されば印度と日本とは全く関係なきも佛教なるものありて其二つを結び附けたるものなれば、衣食住其他風俗の如きは決して軽視すべからざれども只それだけのことにて人種の関係如何を論ずるは甚だ危険なり、言語は人種を自然に示すものにして貴きものあること勿論なれども一二風俗言語の似寄りを以て日本語の本源を論ずるは大に誤りたる考なり、

抑言語は非常に移り易きものにして印度²¹の黒人も佛蘭西語を話し我々と雖も英語を使用し得るに至ることは容易なることなり、故に英語ならば英語、支那語ならば支那語を談ずる人は支那人と交通を為したる人にて、即ち日本人にして若し支那へ移り往かんとする望みあれば支那語を採用することを得、否我々か故意に変ずることを得るものなれば此点は能く注意せざるべからず、古き所は分らざれども今日歴史的の世界となりては斯る場合は數多あるなり、故に必ずしも言語の同一と云ふことのみを以て人種の同一を論ずること能はず、

尚ほ一つ注意せざるべからざるは言語は種々の影響を受けて変ずると云ふことなり、他國の人民と交際するときは必ず自己の

言語が変ずるものなり、若し他の人民と交際するも其言語が変ぜずとすれば其國の言語は開化の上に於て大に進歩し居るか或は言語は劣り居るも人民が故意に自國の言語を尊んで他國の言語を入れずと云ふ意識的の働きあるなり、例へば独逸の如き随分或時は見すばらしき国民なりしが彼等は羅匈語佛蘭西語を採用せずして運動したる結果今日の独逸語となり居る有様なり、是等は即ち故意に変ぜざる場合なりと云ふ、併ながら其多くの場合は大抵一國の人民が他國と交通を始むる時は必ず言語の混淆することあるなり、其最も盛んなるものは戦争なり、戦争の結果として勝ちたる人の言語は負けたる人の言語を壓制することとは普通の場合に應用することを得るなり、例せば英吉利の如き始めカ(二字アキ)人の居りたる所へローマン来りてローマン語となり、其後アングロサクソン人來りてアングロサクソン語となり、後又ノルマン人來りてノルマン語となりたり、是れ即ち征服したる人の言語、主権者の言語か被治者の言語となる場合なり、佛蘭西も亦然り、ジュリヤスシーザ(居りし時分には羅匈語大に行はれ、其後(三字アキ)人來りてコ(二字アキ)語行はれたり)、又之に反して假令戦争に勝ちたるも其戦勝者の開化が劣る時は開化の優りたる者は良し戦争には敗れたりとするも其戦敗者の言語に引附けらるゝと云ふ一の場合あり、例へば支那の言語を見るに蒙古、元等に征服せられたれども支那人の開化は始終野蠻人よりも進歩し居たるが爲めに其影響を受けず元蒙古等を引附けたり、此例に於て先刻述べたる物集先生の天孫が日本へ降臨せられ大和に居を占められ土人の言語と変ぜられしと云ふ説は如何あらんかと思はる、何となれば当時土人の言語は正しく天孫の言語より進み居りしか余は大に之を疑ふなり、

其他商法に於ても亦然り商業盛大にして其商法上権力ある國の言語は大に行はるゝものなり、例へば亞弗利加の亞刺比亞語に於ける、南亞米利加の西班牙語に於ける、又東洋の英吉利語に於けるか如き皆各々其商業上の権力を有する國の言語に引附けらるゝものなり、又宗教上に於ても佛教、サンスクリット、耶蘇、マホメット等各々其宗教上大に勢力を及ぼす所には從つて宗教を代表する所の言語を以て其言語の媒介を爲すものなり、

学問も亦然り、歐羅巴今日の学問はグ(二字アキ)にして、日本にも亦今日漢語あるが如く学問が非常に盛大に研究さるゝときは其学問を代表する言語の行はるゝハ毎に見る所なり、

斯く種々に比較し見るときは總て実力を有する所の言語が行はるゝことは明かなり、故に日本語を論ずるには前述ぶる如く言

語は種々の影響を蒙りて種々に異なるものなることを注意せざるべからず、

而して印度語歐羅巴語或はサンスクリット語の如きは今日も立派に研究することを得るなり、又へ(二字アキ)、ア(二字アキ)或は希臘羅旬語の如き耶蘇紀元三四世紀頃のものとも雖も今日眼前に取りて比較することを得べきも日本の如きは嶋國にして二千年以上殆ど鎖國的の生活を為したる人種なり、又亞細亞大陸の如き始終兵馬の爲めに蹂躪せられたり、南洋諸國は随分人種の異同あれば斯る場合に印度歐羅巴説を認むるや、又日本語の上に於て認むること得るや否や、余は寧ろ能はずと信ず、然らば如何すべきかと云ふに已むを得ず日本に残り居る言語中亞細亞大陸の言語或は南洋諸國に残り居る言語と多少の似寄りあるや否やを研究すれば自然分るべしと信ず、而して今日以後は進て西伯利亞或は支那北部等の言語も研究することを得べし、殊に朝鮮語を調べたらんには或は朝鮮語の一方言は日本の古言に似居るやも知るべからず、然らば是れより追て研究を積みて右の如きことあれば可なり、若し之なかりしならば如何すべきかと云ふに此場合は已むを得ず日本の言語と外国の言語中に残り居るオ(二字アキ)²⁶を比較するより外なし、其似寄りを研究するには多少の注意を要すれども其言語は自然の言語なるや否やを知るを以て第一の注意とす、例へば鳥の鳴聲をカア〜と云ふ、其カア〜と云ふ自然の鳴聲を取りて日本語にて鳥と云ひ、或は印度語にてカラ〜と云ふ、これと同一に蟬を日本にてはセミと云ひ、支那にてはセンと云ふ、若し其自然の鳴聲と云ふ点より考ふれば偶然に似寄りたるかも知れず、或は雁を支那にてはガンと云ひ日本にてはカリと云ふ、されば偶然鳴聲より取りたるものとせば如何に年月を経るも、其似寄りたるや自然の言葉より出でたる似寄りと云ふことは我々は能く區別せざるべからず、

次に注意すべきことは日本にある言葉が他の国の言葉にあるや否やと云ふことなり、例へば日本にて天をアマと云ふ、然らば蒙古或は満州、支那南洋等地方に此言葉ありやと云ふに天をアマと云ふことは無きも支那にてはア(二字アキ)と云ひ又南洋のア(二字アキ)と云ふ言葉と似寄り居ることは疑を容れざるなり、斯の如く日本の言語が他の国の言語と似寄りあるや否や日本にてア(二字アキ)と云ふては更に分らざれども支那にてア(二字アキ)と云ふは或は青きことを意味するか、されば何れ²⁷の國の言語が本源となるや否やと云ふことを注意せざるべからず、

次に注意せざるべからざるは他の國に日本の言語の如く一の言語にて同一意味の言葉ありや否やと云ふことなり、例へばソラ、

アマ、天と云ふが如く支那語にてはソラと云ふことを何と云ふか支那にてア（二字アキ）と云ことは何なりや、是れ或は純粹の日本語なりや否や、即ち一の言語にして種々の名を有することありや否やを研究するは大に必要なり、其研究の積まざる内は余は妄に他国の言語と比較すること能はずと云ふも不可なしと信ず、

次に注意せざるべからざるは、實物なり、例へば蜂蜜の如きは何れにありやと云ふに独逸のへ（二字アキ）になり漢土にては小亜細亞に産出す、又印度にも産出す、然らば此「ミツ」と云ふ言葉は何れより出でたるものなるか³⁶、又植物中杏又は蜜柑と云ふが如きは我々が今日普通見る所の物なれども其重なる所は何れなりやと云ふに南方の熱帯地方に産出するものなり然らば南方に産出することを知らば蜜柑の日本に入り来ると共に日本に入り来りたる分地³⁷上の考を養ふことを得べし、

斯の如き側より一々言語の似寄りを研究したらんには種々なる証明を為すことを得べしと考ふ、而して前述ぶる所の「ミツ」と云ふ言葉が若し各國共同の言語なりと云ふことを知り得たらんには我々が今少しく奥に入りて研究を為さば此³⁸蜜は例へば日本人種ならバ日本人種が日本に固著したる後に入り来りたるものなるか、或は未だ固著せざる中に移り来ると同時に持ち来りしものなるかを考へ出すことを得べし、若し日本人種が先きに居り而して日本の歴史が始まりたる後に入り来りたるものならんには其蜜は如何なる年代に、如何なる道を通り来りしか、即ち支那人の手を以て来りしか、或は葡萄³⁹牙人、和蘭⁴⁰人の手を経て来りしかを研究せざるべからず、又一の言葉にして三つに行はるゝ如くなりしは如何なる理窟のありたるものなりやと云ふることの説明も出来ざるべからず、若し人種と共に言語が入り来りたるものとすれば天孫降臨の場合に天より持ち来りしか、或は日本の重だちたる人種が持ち来りしか、或は婦化人が持ち来りたるか、或は支那人、印度人が持ち来りたるか或は海辺に吹附けられたる未開的漂泊⁴¹人が持ち来りたるかと云ふが如き側の研究もあらんと思考す、

斯の如き側に付て一々言語の研究を為したる上に其似寄りと云ふことを見出したらんには似寄りたる言語の数の多きを加ふるに従つて其言語と言語との関係の遠近も明かに言ひ得べし、故に印度歐羅巴語の親族即ち父、母、兄と云ふか如きことの似寄りは殆んど普通にある所なり、或は衣食住に關したること、或は眼、鼻、等人体に關したる所の名詞の同しきこと、或は一三三四等の数字の同じきこと、代名詞、動詞の過去現在未来が次に出ると云ふが如きホルメーションの工合等總ての点が印度歐羅巴語の多くの似寄りあるを求められたとするも、多少其側に於て他の言語と關係ありや否やは我々は今少しく奥に入りて確

然たる土臺を調べ見ざれば容易に甲の言葉と乙の言葉と関係ありなと言ふことは出来ざるなり、若し出来ざる以上は即ち人種上単に顔額頭状の似寄りありと云ふ点のみを以て日本語の同否を論定するは余の取らざる所なり余等は確然たるデータを以て進むものなり、さればそれ等のことも決して悪きことにはあらざれども斯は寧ろ大なる仮定説なりと云ふより外はあらざるなり、

上來述べ去りたる側に於て今日までの研究は總て不完全なりと断言するも敢て不可なかるべしと信ず、之を要するに今少し深く研究を尽さざる以上は我々の言語はウラル、アルタイに属するとか、或は印度、亜弗利加に属するとか云ふ如きことは容易に言ひ得ず、否単に事実の上より二三似寄りの点を取り来りて是れが似寄れり彼が似寄れりと云ふが如きことは学問上とる能はざるなり、故に其の誹を受けざるやう今少し確然たる論定を為さんことを望む、然せんには是非とも正しき土臺に依らざるべからず

一 附け加へて申述べ置きたきことは日本語は支那、南洋地方、或は朝鮮地方の言語に似寄り居ると云ふバ（二字アキ）の説を以て種々の想像を描くことは我々は決して止めざれども寧ろ今日の場合それ等のことは慰み仕事と云ふ位の覚悟を為して若し比較する必要を生じたる時は種々の側に於て材料を蒐集したらバ今少し明瞭なる答をなし得るに至るべしと余自身は信ずるなり

田口君の如き或は高橋五郎君の如き御方にあれば種々御名論あるべし、余の意見は上來述べたる如く今日世人が為し居る如き調べ方にては到底精確なる結果は得られざるべしと言ふに在り、

〔資料おわり〕

- (1) ちなみに『東京経済雑誌』は上下二段組みで、各段は二七字、三〇行で組まれている。したがって、この「二十字」という指示の詳細は不明。
- (2) 田口卯吉は一八七九年に『東京経済雑誌』を創刊するが、発行する経済雑誌社の同人たちが田口の私邸で経済に関する議論をかすあつまりがはじまり、翌年「経済談会」となり、八二年に「東京経済学講習会」、八七年から「経済学協会」となった。一九二〇年代までその存在が確認できるという。このほかにも公開講演会や独自調査などを展開し、「実業界・政界・学界・言論界等が自由に交流し得る、日本の経済学研究史にあって独自の意義をもつものであった」と評価されている(松野尾裕『田口卯吉と経済学協会——啓蒙時代の経済学』日本経済評論社、一九九六年、四頁)。経済学協会の例会は年に七、八回、総計で一五〇回をこえたが、田口が欠席したのは海外にでかけたときと病気のときの計一〇回のみだという(同前、三三四頁)、同書には、『東京経済雑誌』に掲載された演説筆記のリストがある(同前、三二五―三三三二頁)。
- (3) 原文、一字アキの指示の右横に「ピン」とあるのでこちらにしたがう。
- (4) 演説にいたる経緯、田口卯吉、上田敏との関係は本解説第二節参照。
- (5) 『東京経済雑誌』のこと(この雑誌についての詳細は、杉原四郎・岡田和喜編『田口卯吉と東京経済雑誌』(日本経済評論社、一九九五年)など参照)。田口の日本人種に関する論考はこの雑誌にはみあたらないが、日本人は「匈奴人種の一族」だと主張した「日本人種論」を田口は一八九五年四月に書きあげている。ただ、これは一八九八年の『楽天録』におさめられることになる文章なので、上田が具体的になにを参照していたのかは不明。一方のちに田口は「大和民族」は「印度、ペルシア、ギリキ、ラテン等と同種」だから、当時ヨーロッパで流行していた黄禍論は無意味である、と主張する『破黄禍論』(経済雑誌社、一九〇四年)を刊行しているように、一貫しない(引用は自序、一頁)。
- (6) 高橋五郎(一八五六―一九三五)。翻訳家、英文学者。一八九三年から立教学校教授。J・C・ヘボンの補佐として聖書翻訳に従事したこともある。
- (7) 雑誌『八紘』は、立教学校文学会が一八九五年三月から刊行したもの。立教の教員であった高橋五郎は、第二号(一八九五年五月一六日)から「比較博言学研究会 附人種学一斑——日本語と蒙古馬來由語(附博言島語)」の関係を連載する。以下、第三号(六月一五日)、第四号(七月一八日)、第五号(九月一五日)、第八号(二月一五日、ただしタイトルは「(比較博言)日本語及人種」とづくが、未完となっている。演説時に上田が目にしたものは、第二号掲載のものだけということになる。
- (8) バジル・ホール・チャンバレン(Basil Hall Chamberlain、一八五〇―一九三五)のこと。イングランドのポーツマス生まれ。日本学者。一八七三年来日。八六年東京大学文科大学の教師となり、博言学(言語学)などを講じる(一八九三)。

いわゆるお雇い外国人であったが、一九一一年にジュネーブに隠棲するまでの四〇年近く、大半は日本にあって日本の文学・言語・歴史などの研究を行なった。琉球語やアイヌ語に関する研究もある。古事記を英訳もしている。『日本口語文典』『日本小文典』など文法に関する著書もある。博言学の講義が上田万年に与えた影響はおおきく、近代国語学成立の契機をつくった人物ともいえる。評伝に補家重敏「ネズミはまだ生きている」(雄松堂出版、一九八六年)がある。

- (9) ジョセフ・エドキンス (Joseph Edkins, 一八二三—一九〇五) のことか。ロンドン伝道教会から派遣され、北京・上海で布教した。東洋学者・中国語学者としても知られる。中国語説は『On the Old Japanese Vocabulary, Transaction of Asiatic Society of Japan, Vol. X, 1882』で展開されてくる(金田一京助『国語史 系統篇』刀江書院、一九三八年、四八頁)。
- (10) アントン・ボラー (Anton Boller, 一八一〇—一八六九) のことか。一八五七年に「日本語がウラル—アルタイ系に属することの証明」(ドイツ語) を発表する(佐佐木隆「日本語の系統論史」『岩波講座 日本語 12—日本語の系統と歴史』岩波書店、一九七八年、三〇五頁)。
- (11) 注(7)の高橋五郎の論説では「ペーリント(ペリント)・ガボル (Bálint Gabor)」と表記されてくる(一八一四—一九一三)。
- (12) マジャール語のこと(原語による呼称)。ハンガリー語とおなじ。
- (13) アッカド。
- (14) エンゲルベルト・ケンペル (Verfasst von Engelbert

Kaempfer, 一六五一—一七一六) は出島のオランダ商館にいた医師で、その著『日本誌』(遺稿の英訳版が一九二二年に刊行)の第一巻第六章「日本人の起源について」において「バビロンの言語混乱後」にある集団が日本にやってきた」という論を展開している(日本語訳は、今井正訳『新版』改訂・増補 日本誌—日本の歴史と紀行』霞ヶ関出版、二〇〇一年などがある)。井上哲次郎「人種、言語、及び宗教等の比較に依り、日本人の位地を論ず」(『東邦協会報告』二〇号、一八九二年二月)で短く紹介されているが、当然というべきか「荒唐無稽の想像説」と一蹴されている(二八頁)。

- (15) ウィリアム・ジョージ・アストン (William George Aston, 一八四一—一九一〇) のこと。イギリスの外交官、日本学者。一八六四年に日本語通訳見習として来日、七五年から八〇年まで東京のイギリス公使館日本語書記官補佐、八三年まで神戸領事館勤務、八四年から八六年まで朝鮮の初代イギリス総領事。八九年まで東京のイギリス公使館日本語書記官。朝鮮語も学習し、一八七九年には「A Comparative Study of the Japanese and Korean Language. The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, New Series, Vol. II」を発表。上田が言うのはこの論文のこと。朝鮮語との比較をつうじて古代日本語にP音が存在していた可能性を示すなど、現在でも評価は高い。のちに上田は「P音考」を発表することになる(「語学創見」『帝国文学』四卷一号、一八九八年一月)。アストンのこの論文で大野晋の抄訳「日本語と朝鮮語の比較研究」として日本語で読むことができる(池田次郎・大野晋編『論集 日本文化の起原 第五卷 日

(28) 「形相学」のききまちがえと思われる。

(29) インダス川のこと。

(30) 『古事記』では、イザナミは火の神「火之炫毘古神」(またの名は「火之迦具土神」)をうみ、亡くなったとある。

(31) 文脈からすると、西インド諸島のことを指していると思われる。

(32) 一八九四年の講演「国語と国家」でも「如何に亦現今の独逸が、其国語を尊奉し、其中より外国語の原素を棄て、自国語のよき原素を復活せしめつゝあるかを見よ」など言及がある(上田万年(安田敏朗校注)『国語のため』平凡社東洋文庫、二〇一一年、一九頁)。

(33) 文脈からすると、ケルト人が妥当。

(34) 文脈からすると、「フランク人入来りてフランク語行はれた

り」が妥当。

(35) オノマトベ(擬音語)か。一八九六年度、九七年度の上田万年の「言語学」の講義に出席した新村出のノートを復刻した、新村出筆録・柴田武校訂『上田万年 言語学』(教育出版、一九七五年)には、「各国語ノ相似 ○各国語ノ相似ニ付テ調ナルニ方テ心得ベキ条々 1) Mere Coincidence? or not? a) onomatopoeic words」で、蟬(セン、セム)、雁(ガン、カリ)、カラスの三語がかかげられている(二五七頁)。

(36) 前注のつづきで、「d) fauna flora 動植物ノ分布」があげられ、事例の一番目に「蜜ハ Asia Minor ヲ原トス」との記載がある(同前、一五八頁)。

(37) 意味がとおりにくい、とりあえずこう翻字した。

(やすだ としあき/言語社会研究科准教授)